

もど子と人婦

號二十第卷七十第

行發日五月二十年六正大

冬の繪本

夏がうつろひ、冬が来る—
霜の朝々、凍る指
窓の駒鳥、冬がらす、
さて繪の多い物の本

凍つた水は石のやう
上を歩けばコチくと。
しかし小川は流れてる、
繪本の中に流れてる。

きれいなものは残つてる、
羊も飼^{かひて}者も樹も枝も、
子供の眼をば待つてゐる、
繪本の中で待つてゐる、

近い町々、遠い海、
それらは皆何うしたか、
お伽の姫は何うしたか、
繪本を見れば皆わかる。

—ステヴァンソン—